佳作

訪問看護を未来へ繋ぐ

新潟県上越市立城西中学校
３年　上野　結斐

私の父は、去年がんで亡くなりました。新型コロナウイルスの影響で、病院で緩和ケアを受けると面会が難しいこと、そして「最期は家族といたい」という父の強い思いから、自宅療養を利用して、自宅での看取りを選択しました。そこで私は初めて「訪問看護師」という職業を知りました。二日に１回程度来てくださる看護師さんは、看護以外でもたくさんのサポートをしてくださり、さまざまな面で私たち家族の心の支えでした。父は、趣味でしていたバンドの話を看護師さんに聞いてもらえると、とても嬉しそうでした。妹も看護師さんが来る日をいつも楽しみにしていました。

父が亡くなったとき、当直ではない看護師さんも、父の顔を見に来てくださいました。私と妹が泣いてしまうと、看護師さんも涙を流して、私たちを抱きしめてくれました。不安なことがたくさんの毎日だったけれど、看護師さんが父だけでなく、私たち家族のことも気にしてくださったおかげで、笑顔で父とお別れすることができました。私たち家族にとって、訪問看護師さんはとても大きな存在でした。ここまで患者さんと家族に寄り添えるのは、訪問看護師にしかできない仕事だと私は思いました。そして、夢がなかった私に「訪問看護師になりたい」という夢ができました。

そんな素敵な職業ですが、あるアンケート調査によると、訪問看護の利用経験者の約６割以上が、ケアマネージャーか医療機関から紹介されるまで「訪問看護」を知らなかったということがわかりました。そもそも訪問看護とは、看護師が患者さんのお宅に訪問して、その方の病気や障がいに応じた看護を行うことをいいます。訪問看護を利用することで「住み慣れた自宅で療養したい」「できれば最期まで、思い出深い我が家で自分らしく過ごしたい」など、患者さんの思いをかなえることもできます。

病院看護師とは異なり、治療に加え、日々の生活に直結するサポートなども訪問看護師の大切な仕事です。難病、がん、小児の利用者が多く、コロナ禍の今は、新型コロナウイルスに感染し、自宅療養中の方のところへ行くなど、急速に需要が高まっています。そんな訪問看護ですが、調べてみるとたくさんの課題があることがわかりました。

それは、訪問看護師の人数に、かなり地域差が見られることです。まず、訪問看護ステーションを運営するためには、保健師、看護師または准看護師が常

勤換算で、2.5 人以上必要で、うち一人は常勤であるという人員基準を満たさなくてはなりません。都心では少ないながらも大規模ステーションがある一方、地方ではその最低限の看護師などが集まらないという問題が起きています。訪問看護が必要だけれど、人員が足りないということは、とても大きな課題だと感じました。

さらに、訪問看護師がとても少ないという課題もあります。年々訪問看護を必要としている人は増加しているにもかかわらず、一事務所あたりの常勤換算従事者数は、５人前後のまま横ばいです。現在、全ての看護師の人数のうち、訪問看護師の数はわずか 4.9%に留まっています。そのため、看護職員５人未満の訪問看護ステーションは全体の約６割を占めています。人員基準を満たしていても、少ない人手では 24 時間対応は難しく、実際 24 時間対応体制の届出の割合はとても低いです。人手不足は、非効率さやスタッフの負担の大きさにも繋がります。

他にも、小規模事業所が多く、サービスの継続的な提供が難しいことが課題です。そのような中でコロナ禍になり、感染防止の観点で利用者の利用自粛や、訪問看護ステーション側のサービス制限が行われ、さらに経営が難しくなっています。

私は調べてみて、父にとって、私たち家族にとって大切であった職業が、こんなにも多くの課題を抱えていることに驚きました。これらの課題が解決され、「訪問看護師」が多くの人から必要とされる職業として、未来に繋がってほしいです。そして、私はこの一員になりたいと思っています。父と私たちを支えてくださった看護師さんのような看護師になり、この職業を、私は未来へ繋いでいきます。